の調査に取係つたのであるが大東亞戰爭勃發の關係で十分なる調査が出來なかつたのである。故に尙ほ地上の調査を行ふと共に更に精密に行ふために壹岐の方面に於いて縱坑を掘り地下の調査をなす計畫を樹て以てこれが遂行に當る筈であつたが、併し乍らこれも種々の都合に依りて調査は昭和十八年度に於いては十分出來なかつたのである。併乍ら本年度に於ては地上から縱坑或は横坑を掘り、取敢へず關釜の海底調査を行ふ計畫の下に調査費についても相當額を計上して其の承認を得て居るから昭和十九年度からは本格的に調査に當る方針であり又大東亞共榮圈の軍事産業は勿論政治經濟交通文化を結ぶ一大動脈としての大陸横斷鐵道の建設計畫は共榮圈諸地域の建設の進捗と併行して漸次具體化しつゝある。現に山本大東亞次官は、……大東亞の經營上大動脈路線の建設に有ゆる方面から考慮するの必要があるか政府も大東亞共榮圈の進むと共に計畫を進め調査を續けて居る、又關係諸國間に於いても産業開發及び國內輸送等の强化のために期せずして期待をもつに至つたので緊密の連絡の下に諸施設を進めてゐるが、現在はこの計畫は或る程度に迄進捗して居ると議會で報告して居る位であるが、共榮圈を繫くこの交通の大動脈は勿論大東亞の心臟としての首都たる東京を出發點として下關に至り釜山迄は海底隧道竣工迄は海路を通る外は全部陸路によりて朝鮮經由新義州滿洲經由奉天より北支に入つり天津を過ぎ中華民國の首都南京に至り、更に上海、抗州、衢陽、廣東、南寧、鎭南關、河內等を經て泰國の首都盤谷を經て昭南に至る線路であるが、この間鐵道の未だ敷設されてゐない區間があることと、佛印河內間の鐵道のみは狹軌であることは難關であるが、未設區間は廣東……南寧……鎭南關の路線と西貢廻り第一案ならば西貢……プノンペン間六百四十粁又はコンケル廻り第二案ならば、ブナタ……コンチン間七百七十五粁であるが、第一案に依れば九日十一時三十分、第二案は八日三時四十分にて東京と昭南とが結び付く次第である、兎も角前記田誠氏の大東亞交通政策は近き將來に於ける大陸横斷鐵道計畫と大東亞建設とに大なる示唆を與へるものとして吾々に裨益するところ多大である。「一記者」

聖路加の旅行記錄の重要性

長谷川久一

海運に關して殆どその能力を十分に發揮することのなかつた羅馬が一意專心道路に重點を置いたのは、蓋し當然のことで、その軍事上、政治上の企畫からつくられし道路が、驚く可きほど完備せるものであつたといふことは、シーザーの如き一時間十一粁の速度をもつて進んだとのことから見ても明瞭である。但し右は幹線道路に就て云ふことであつて、政府の力の及ばざる枝線に至つては、露頭洗足の傳道者たちの杖の先きから生れ來つたものが隨分あるに相違がない。之れ等によつて、羅馬帝國の版圖三百乃至四百平方粁に對し、道路の延長は約十四萬粁（恰もフランスの十六世紀時代に相當すと）に及んだと云はれるのである。斯る事實を前にしながら、聖路加のルカ傳中に詳述せる七十人の傳道旅行につき、之を否定し去らんとするものゝあることは、吾人の怪訝にたへざるところで、而かもその論據は、どう考へてみても不合理にして淺薄なるものに過ぎぬのである。凡そ其の抹殺論の第一の理由として擧げられるのは、七十人の傳道旅行の記載は、ルカ傳（十章一節—二四節）にあるのみで、他の共觀福音書は一言半句も之に觸れて居らぬと云ふのにあるが、こは最も思はざるの甚しきものと謂ふべきである。既にヴエルハウゼン、ヴエントライト、エドワード。マイヤー等の諸學者の說くが如く、マルコ傳は福音書中で最古のものである以上それよりも後に編輯せられしルカ傳に更に新らしき資料に基きて、マルコ傳に記されざりし記事のあるのは、少しも異とするに足らない。而してマタイ傳は、是れ亦諸學者が凡べて異口同音に述べて居る如く、マルコ傳とルカ傳との中間的性質を帶びたる編述であつて、且つ主としてマルコ傳に依存して取材せるものであるから之れに七十人旅行のことが載せて無くとも敢て不思議とすべきではないのである。尙ほ編述の年代から云つてみても、マタイ傳より後にルカ傳が出來たとする說が頗る有力であるから、ルカ傳に新規の記事があつても少しも怪しむを要しない。ルカ傳の描き出しの冒頭、「我らの中に成りし事の物語につき、始よりの目擊者にして、御言の役者となりたる人々の、我らに傳へし、其のまゝを、書き列ねんと、手を著けし者あまたある故に、我も凡ての事を最初より詳細に推し尋ねたれば テオピロ閣下よ、汝の敎へられたる事の確なるを悟らせん爲に、これが序を正して、書き贈るは善き事と思はるゝなり」とあるところから考へて見ても、ルカがこの書を顯官テオピロに獻じようとせる爲め、あらゆる努力を傾倒し、種々の材料。史實を求めて、なるたけ詳細に書き列ねたことが判るのである。之に反しマルコ傳は、當時の基督敎會の傳道上の實際的經驗に基いて編述せられたもので、著書は知つて居りながら、約說して省略したと思はれる節が多々ある次第である。そんなことから一層詳說した福音書を希望するの氣運が釀成せられてその結果、マタイ傳及ルカ傳が出來たと思はれるのであるから、ルカ傳特有の記事があつて、少しも差支は無く、之を抹殺するのいはれは毫も見出し得ないと思ふのである。唯七十人の名前のカタログがなくその爲めに事實を疑ふ向きもあるが、名前ぶれが殘つてゐないからして事の事實無しとするのも妥當となし難きは勿論である。名前が判らぬといつても皆目見當が附かぬといふのではない。勿論十二使徒の名

はわかつてゐるし、七十人中には、バルナバ、ソステネ、ケパ（ペテロと別人）。マッテヤ、タダイ等は居た筈と認められてゐる。そのなかで最後のタダイであるが、彼は後代教會に一番もてなかつた使徒で彼に献げられた教會は極めて少く且つ彼の名をつける基督者は殆ど無いと云つてよい位不人氣である。彼は基督昇天の後歸國してアブガル王の黒癩病を癒したといふことである。傳道にも、宣撫上にも頗る卓越せる人物であつたと思はれるのに拘はらず、毛嫌ひされてゐる恐らく之と同じやうな風に、七十人旅行の史實はストラウス、バウル等批判的の學者からは好まれなくて、種々の論據を構へ之を否定せんとする傾向が著しい。蓋し之を肯定すると十分な意味に於ての福音書であつて、而かも共觀福音書の根幹と見做されてゐるマルコ傳に、此の事柄を記してないのは、一つの缺陷となることを怖れてゐるからかも知れぬ。勿論福音書は一切の史實を餘す所なく網羅することを必要とする歴史の記述とは異り、福音書に相應はしいことだけを撰び出して採錄したものであるし、各書夫々の特色があり、それで有無相通じて何れも各々が重きを爲すのである。殊にルカ傳には、他の共觀福音書に無き說話がかなり多く挿入されてゐるから、この傳道旅行の記錄も亦ルカ傳獨特のものであつて少しも差支ない。偖て七十人の出發に當ては基督は收獲多きに拘はらず刈入するもの少しとて、一同の任務の至難重大なることを說き、非常の覺悟を以て事に當るを必要とすることを力說し、尙ほ服裝に就ては、鞋を用ゐず洗足で行けと云はれた。洗足で行くのは、當時の學者たちが通例之を用ゐて居たのと、變はつた行き方を命じたのであつて、以て下層の人々とも伍すべき用意周到ならしめられた。町々を尋ね人々と自由にうち解けて飯食して、かけへだてなく爲すべく、若し或る町や邑や村が受入れずとすれば、其の全體に對し、「われらの足につきたる塵をも汝らの町に棄つ、されど神の國は近づけり」と大路に出て宣言せよとて細々と訓されたのであつた蓋し紀元前二世紀の頃から、羅馬上流社會の莊園は、イタリー本土のみならず、外藩の各地に點在するやうになつたが、時の推移と共に、この傾向は益々著しさを加へて、アフリカ、小アジア、シシリー、ザルヂニヤ、ガリヤ地方にまで及んだ。七十人旅行の行先は判然してゐない、恐らく准異邦に止まる狹い一地方丈けに極限されたと思ふのであるが、夫れ等の土地にも亦羅馬式大土地所有の傾向のあらはれゐたりしことは疑をいれず、この羅馬勢力に屈することなく敢然として傳道に從事すべきことを命じられたのであつた。高山樗牛は、其の論文「基督と日蓮」のうちで、「カイザルのものはカイザルに歸へし、神のものは神に歸へせ」と宣へるその言葉こそ實に羅馬帝國の至上權に向つての一大折伏で、恰かも日蓮が當時の本邦の旣成宗教に對する折伏と同工異曲だと論じてゐるが、人間靈性の獨立、自由、光榮、威嚴に萬古不動の是認を與へて彼れ等を奮ひ立たしめ給ふたのであつた。即ちこの傳道旅行は、單に基督に先發して準備行爲に從事すべき一時的のものに過ぎざりしにせよ、其の意義に至つては、前記の如く頗る重要にして、宗教發達上からも看過することの出來ぬ性質のものに屬してゐる。唯前述する如く、其の時まで未だ異邦傳道は始まつてゐなか

つたのであるから、其の足跡の及んだところは、サマリヤ邊の比較的小部分なりしが如くであり、期間とても、極めて短きものなりしは、全體の文意からして推し量ることが出來るし、かたがた大學傳道とは云ふものの、時間的に地域的に擴がりがあるものでは決して無いのであるが、と謂つてその質に於ては、時の短きに拘はらず、地域の小なるに拘はらず、傳道の皮切りとして、その先驅的使命は、意義重大であつて、教會歴史としても大なる一の事件として取り扱はるべきものたるを失はぬのである。殊に同ルカの手に成れる使徒行傳二十七章所載のパウロを羅馬に護送する船の航海記事は、衆目の視るところ、世界最古の詳細な航海記錄とされてゐる以上、陸上交通については、この傳道旅行は陸に於ける交通記錄として重要性を有ち、この二つが海陸交通に關する古代記錄の双璧たる可きものと視られ得ないだらうか。暫らく記して大方諸先輩の高教を仰いでみたのである。殊にこの旅行記事がもつと詳しく闡明せられて來て、タダイの如き醫療的に卓越せる手腕をもちながら後世殆ど顧みられざる使徒が表面に浮かみ上がつて、重要視せられんことを飽くまでも翹望せざるを得ない。是の如くしてこそ、皇軍占領地、進駐地に對する宣撫・文化工作にも亦この上なき的確の指針が示されるのではなからうか。唯共觀福音書間相互の調和といつたやうな點にのみこだわつてしまつて、交通史上、教會史上重要視せらる可きこの一大事件を等閑に附すべきではないと思はれる。この事件を活かしてこそ、殆ど無條件に刑餘のものにも、手の附けられなかつた放蕩兒にも救ひの御手がさし延べらる可きことを強調したルカ傳の一大特色が光彩陸離として輝くのである。この記載を以て記者ルカの捏造なり、又は直ぐ其の前に記載されてゐる十二使徒派遣の事實の異傳なりなどと苦しい解釋に沒頭するは、福音書を以て、「日星河嶽の大文字(高山樗牛の言葉)」となす所以ではあるまいと思はれるのである。

——一八・一二・二——

スマトラの道路、自動車事情

清野謙六郎

舊蘭印を語る者は、口を揃へてジャワの交通の發達、殊に其の道路網の優秀と自動車交通の高度化を讃へるが、スマトラを初めボルネオ、